

答弁集

あるいは、日頃の備えについて

三村一貴（博士課程一年）

人から聞いた話である。ある人がバイクに乗っていて、自動車にぶつかられた。彼は体育教師だったので、投げ出されるや即座に前回り受身をとった。そのため傷一つ負わずに済んだという。またある人は自転車に乗っていて、自動車とぶつかったが、その刹那、彼は数学の天才だったので、両物体の速度からしてどの角度でぶつかれば最も衝撃が小さいか計算し、然るべき角度でぶつかった結果、傷一つ負わずに済んだという。学んだことは日常生活に生きて始めて意味がある。

我々学生は、交通禍の犠牲者とならぬよう用心すると同時に、不慮の質問を受けても直ちに答えられるよう常日頃から備えていなければならない。大学院生にもなると、大学で何を勉強しているのか、少なくとも年に百回は訊かれるようになる。その時、質問をはぐらかしたり、「笑って答へず心おのづから閑なり」を気取ったりしてはならない。専門家でない人々に自分の研究を知ってもらふ絶好の機会だからである。知識を共有することは陰徳を積むことにも繋がる。

研究室の人々と野沢温泉に行ったときのことである。外湯に浸かっていると、一人の禿頭翁が有ってわたくしに話しかけてきた。

「ご様子を拝見しますと東京の方ですな」

「はあ、横須賀生まれの横須賀育ちでございます。ですが学校は東京です。」

「横須賀ですか。そうすると東京へは何線ですか。省線言うたら歳ばれますなあ。」

わたくしが大学院生であることがわかると、案の定、専門は何か訊いてきた。こういう時わたくしは「漢文」と答えることにしていた。

ご存じの向きもあろうが、我々の研究室は「中国語中国文学研究室」である。しかし中国文学ならまだしも、わたくしが専門とする所の「中国語学」など、普通は未知の語彙に属するであろう。漢文というと、あらかじめ訓点のついているものを読み下してゆくのを思い浮かべる人が殆どであろうし、それはわたくしの行う所とは異なるのであるが、訓読するとせざるとに係わらず、広い意味で古典漢語を扱っていることには変わらないので、「漢文を研究している」と言っても嘘にはならない。

「ほう、漢文ですか。白樂天は^{おうな}嫗にも分かるように詩を作ったようですが、八十の翁にも分かりますかなあ。」

この翁、熱い方の湯船に平然と浸かっていて、話しぶりからすると白樂天と顔見知りと思しいが、何を隠そう、かの有名な^{りょうどうひん}呂洞賓先生その人であった、というわけではない。しかし漢文という共通語彙があるとこのように問題なく意思疎通が可能になる。

とはいえ、中国語文法の研究ということはどうにかして分かって欲しいのも偽らざる感情である。いつも説明に苦慮していたのであるが、ある時偶然妙案を得ることができた。

知人が DJ をやっていて、概ね月に一度、その集まりに行く。音量が大きいから、耳に負担がかかる上、口を利こうとすれば大声を出すため喉に負担がかかり、語学に携わる人間は本来足を踏み入れてはならない。しかし集まる面々が一々只者ではなく、わたくしはここに価値を見出している。

さて、初対面の人から例の質問を受けた。

「漢文の文法を研究しています。」

「というと、つまりどういうことですか。」

「要するに、今までの説明で本当に良いのかを問うているわけです。」

「なるほど！」

このやりとりがあつてからというもの、わたくしは気をよくして、機会ある毎にこのような答え方をするようになった。

英会話の授業が終わって駅へ向かう途中、教室で一緒になった男性二人と少し話をした。どちらもコンピューター関係の会社に勤めていて、同僚なのだという。

例によって、例の問答が始まる。大学院では何をしているのか。漢文の文法を研究している。それはどういうことか。今までの説明で本当に良いのか問うているのである。

一人は「なるほど！」と言い、一人は「え？」と言った。

「要するにこういうことです。言語が刻々と変化しているように、言語に対する見方もまた刻々と変化しています。古文や漢文にしる、英語にしる、学校で文法の説明をお聞きになったと思いますが、それが唯一絶対の説明というわけではないのです。」

ついでに、中国語学と聞くととんでもない珍種のように思われるかも知れないが、言語学の一分野であつて、決して卑小な営みではないと付け加えておいた。「そうそう、実はメジャーな筈なんだよ」ともう一人の男性も加勢してくれた。

以上はわたくしの日常談話のいくつかであるが、このようなことを行っているのは現実世界の間人だけではないようだ。ある人に薦められて読み始めた小説 *La septième fonction du langage* (“言語の七番目の機能”) の中で、大学院生の Simon Herzog (日本であれば博士課程の一年生) が警部に話を聞かれて記号論の考え方を説明する場面がある。ソシュール、ヤコブソン、サール、オースティンといった人名が出てきて、いつぞや後輩にしたような話である。その後輩は警部と違って友好的であるから良かったものの、この局面でこの説明では身を滅ぼしかねない。君子は不慮の職務質問の如き造次顛沛ぞうじてんぱいの際にも然るべき応答ができるよう、備えておくべきであろう。